

# ドリーム

2D DREAM MAGAZINE

113

18  
未 満

今号の  
Special Fetishism Series  
特集

# 聖 飛

# 出 産

試し読み版



## 特務戦隊カラフル・フォース

[漫画]火黒夜

戦隊ものはよく敵の方を応援して残念な子供でした。ヒロインと触手はとてよく似合うと思います。(火黒夜)



新連載

## 煌翼天使ユミエル

プリズンオブサクリファイス

[小説]黒井弘騎 [挿絵]白う〜風い

なんとなんと! 10年ぶりのコミック純刊に続き、令和の時代にユミエル復活! これぞ二次元ドリーム! (黒井弘騎)



新連載

### ●連載&読み切り漫画

#### 仙女強制受孕

〜コトダマ言いなりに交尾実験〜

[漫画]李星

お読みいただきまして有り難うございます。これからもっとエッチで可愛いヒロインが描けるように頑張ります! (李星)



### ●連載&読み切り小説

#### 魔法少女マジカルレイン

[小説]上田ながの  
[挿絵]TANA

今回は少子化対策特集号か! ってわけで、少子化と動物愛護を訴えるために書きました! (上田ながの)



#### きらら★キララNTR

魔法少女は変わっていく... THE COMIC

きららシリーズの中で個人的に一番好きな回です。気合い入れて描きました! (雨宮ミズキ)

[漫画]雨宮ミズキ

[原作]さかさ傘

[キャラクター原案]希望つばは

#### 退廃巫女 宝仙院菜

〜怪物の母娘にされた聖女〜

化物と美少女の組み合わせは鉄板ですよ。ということは年役おじさんは異形なんでしょうか... (ばふえ)

[漫画]ばふえ

#### 超昂神騎エクシール

〜双翼、魔悦調教〜 THE COMIC

私が食事をする時にねこが自分のきんたまを添えるようになってから、1年を迎えそうです。(SHUKO)

[漫画]SHUKO

[原作]アリスソフト

[原案]峰崎龍之介

### ●特選コラム

二次元GスポットXtasy

ちゆ12歳のひとりえっち

官能小説執筆汁まみれ ~作家のココロ~

美少女コミック雑誌のゲンバ

にやるらのブログ出張版

夢崎

ちゆ

筑摩十幸

稀見理都

にやるら

#### ママは対魔忍

乱れ堕ちる熱くノ一

ダイエット挑戦。結果半年で-10kg達成! 次は筋トレで、細マッチョエロ作家を目指します! エロは筋肉! (新居佑)

単行本

[小説]新居佑

[挿絵]えれ2エロ

[原作]BlackLilith

#### 孤高の狩人エリア

〜侵略、屈辱、幼蟲出産〜

麻婆豆腐には片栗粉を入れない派の自分ですが、最近入れるようになりました。大きさ1! (黒井純)

カラー小説

[小説]黒井純

[挿絵]ビッグシャイン

#### 魔界女帝レイシア

〜 pregnancy、産む快楽〜

世の中色々大変ですが、エロくらいは豊かでいたいものです(エアろくろを回しながら。(峰崎龍之介))

[小説]峰崎龍之介

[挿絵]黒シチ

#### 謎妖少女ヤコ

妖産みし妖産ざり

最近多化でゾイド作っていません。こんなんじゃプロゾイダーに出来ないんですよえ。(下山田ナンバーの助)

カラー小説

[小説]下山田ナンバーの助

[挿絵]ぼっしい

### ●今号の特集

# 異形出産特集

#### 鬼討師津那

〜淫孕の朔月〜

犬に仏性有りや無しや、鬼に仏性有りや無しや。いやそんな話じゃないんですが。(斐斐嘉和)

[小説]斐斐嘉和

[挿絵]2=8

地球が今

危機に瀕していた

巨弾新連載スタート!

突如現れた触手生命体  
通称「テナタクルス」によって

人類は  
蹂躪じゅうろうされていたのだ

しかし……ッ

それに対抗する  
者たちもいた!



それが特務戦隊

レッド  
あかりん  
赤井倫

ESCAPE  
特務戦隊

Colorful Force  
ゲキウゴースト

第1話 触手生命体の恐怖!  
異形出産の罠!!

ブルー  
あなつき そら  
水無月 蒼空

漫画  
COMIC

かぐや  
火患夜

正義のヒロイン見参!

カラフルフォースである!!

カラフルフォースだ

来てくれたんだ

司令!!

イエロー  
なつめ  
夏目 ひまかり





奇襲は成功  
敵は混乱している

敵を  
各個撃破せよ！

カラフルフォース  
各員に告ぐ



了解!!



まったく…  
私たちの街を  
好き勝手に…

さらにそこに住む  
人たちを  
悲しませる

そんなの

私たちが

許さない!

…ふっふっ

なるほど  
なるほど





あなたがこの星の

強いヒトなのね

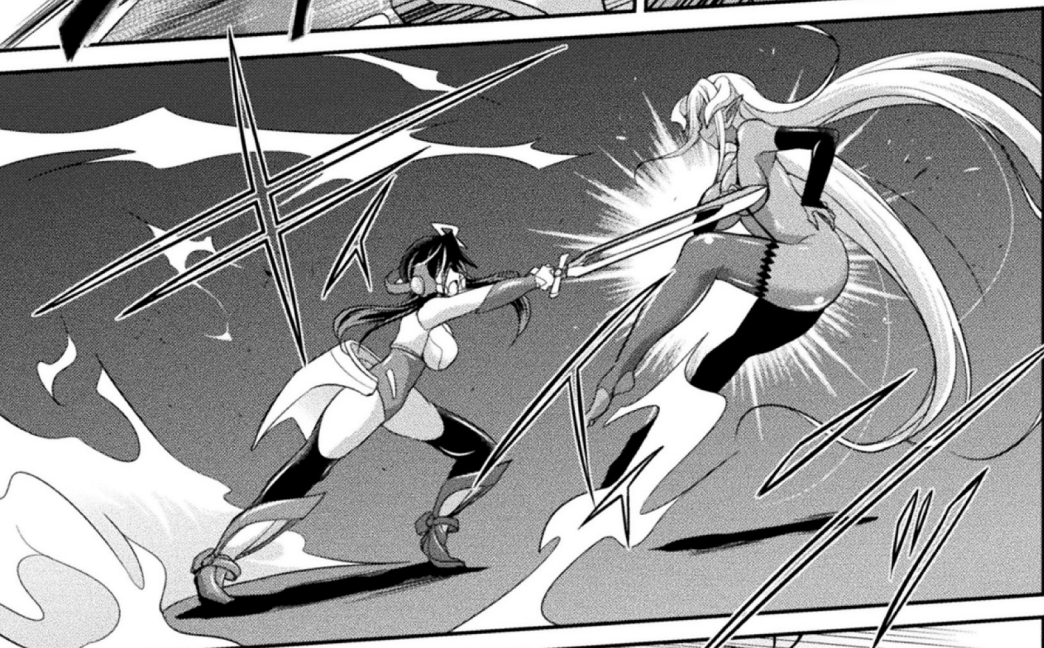


な...!?



新  
手  
の

テ  
ン  
タ  
ク  
ル  
ス  
!!

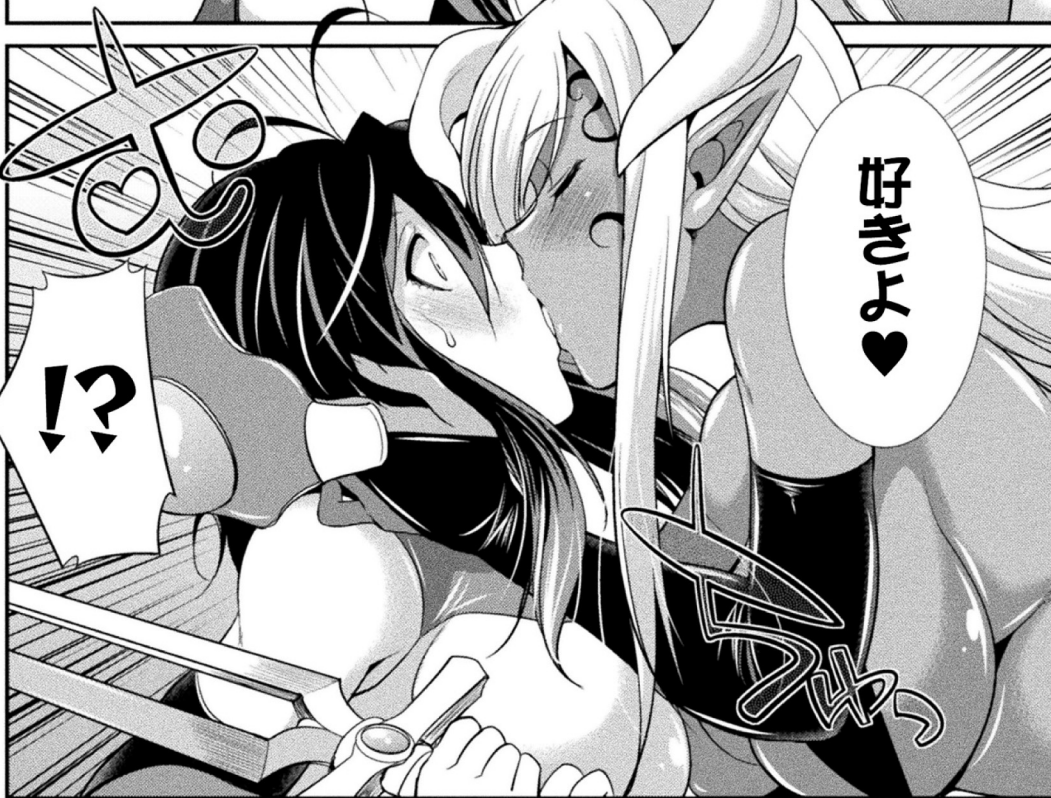


ふふ…  
いいわねあなた

勝ち気で強くて…  
そういうコ

好きよ♥

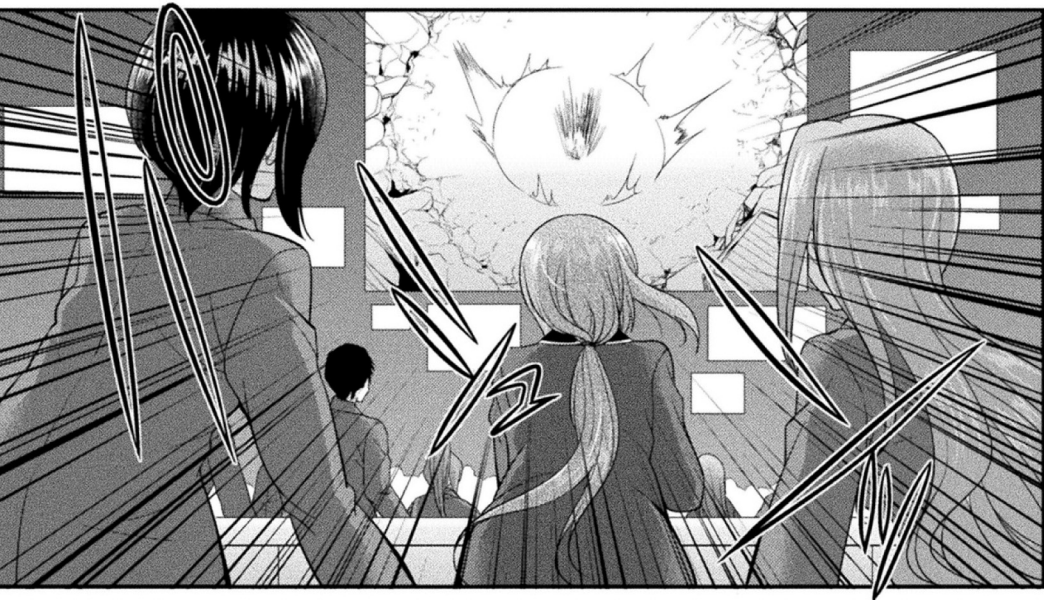
!?





——ッ  
待ちなさいみんな

引き返して



ロ：ロストです  
カラフルフォース三人  
ともに反応ロスト

す…すぐに  
追跡開始します

まさかあんなモノが  
存在するなんて

お願い…みんな







マ明察♥

ふふふっ

…キサマツ



み…みんなはどうした!?  
この人たちを  
解放しろ!!

あら  
欲張りね

まあちよつと  
落ち着きなさい  
強いヒト



…貴様も  
テンタクルス…?

言葉の通じる  
テンタクルスが…?

ふふ…  
そう私たちはそう  
呼ばれているのね

それじゃあ  
ソレで私も  
名乗りましょう

私はノワール

触手生命体  
テンタクルスの女王  
ノワールよ



ナニ？  
不思議なことを



あらあら可愛い声  
出しちゃって♡



そしたら  
やることなんて

一つしか  
ないでしょ♡

クワッ

ジュッ

最強の聖天使と、  
傀儡の贄乙女  
新たな影魔が蠢く  
学園地獄に

ユミエル・マリエルが  
超光臨!

煌翼天使 カズノブ  
サカアキス

ユミエル

—話 優しい出会い

小説  
NOVEL

くろいひろき  
黒井弘騎

挿絵  
ILLUSTRATION

うし  
うり  
白う〜風い

「い、いや……やめて、やめてください……っ！」

とうに終業を迎え、人気もなく静まり返った夜の学園——聖メトセラ学園の校舎裏に、絹を裂くような悲鳴が響き渡る。

闇と影に覆われた狭路では、聖メトセラ学園の制服を纏った一人の男子学生が、同じく制服姿の少女を力づくで押し倒していた。

「グへへ……何を今更怯えてやがるんだ？ お前が悪いんだぜ愛奈ア……そんな可愛い顔して、授業中もデカチ揺すって俺を誘いやがってよお……」

「そ、そんな……あうっ。わたし、そ、そんなこと……」

愛奈と呼ばれた少女は、恐怖と羞恥とに声を震わせた。

男の言うとおりに可憐な美貌、そして学生服でも隠しきれない豊満な巨乳は、年頃の男子にとっては目に毒かもしれないが——だからといって欲望のままに振る舞うのは、理性的な人間のすることではない。

そう。

それは、男が人間だったとすれば、の話だ。

「お、おかげで……グヒッ！ 俺も我慢の限界だぜ……グヒヒ！ こ、この姿で

……本当の俺の……シザーエクリップスとしての姿で！ 思いつきりめちやくちやに犯してやりたくなつちまつたじゃねえかよお！」

愛奈の眼前で、男子学生の姿が変容していく。バキバキと音を立てて全身が肥大化し、学生服を引き裂いて露出する。歪んだ肉体は硬質な外骨格に覆われ、腕も足も長く伸びて異形のシルエットを描き出した。欲にまみれた狂貌は、もはや人の面影も残さない、凶悪な肉食昆虫のものへと変貌へんぼうしていく。

「っひ!? な、何……いや、いやあああああつ！」

闇夜にあつてもなお明らかかな、この世にあつてはならない異形の姿。それを目の前にして、愛奈の常識は一瞬で破壊された。

エクリップス——それは、人であつて人でない存在。欲望の影に呑み込まれた、心弱き人間の成れ果ての姿。抑えきれぬ欲望に負けた人間は、影に潜む悪魔のような人格によつて心を蝕むしばまれ、肉体を乗っ取られて異形の怪人へと姿を変える。

欲望や嗜好しこうが無尽蔵に存在するのと同じく、その姿もまた千差万別。少女への肉欲に囚われた男子学生が変じたのは、ハサミムシと人間とが混じり合ったような異形の怪人——シザーエクリップスだった。

「グ、ググ……ヒヒヒッ！ お、犯してやるよ愛奈ア……う、生まれ変わった俺の素晴らしい肉体で……グヒヒヒ！ この自慢のチンコで、お前のマンコめちゃくちやにしてやるからなあ……！」

学生服のズボンを引き裂いて、異形のペニスが股間部から屹立する。鋭い狭角を備えた、ハサミムシの尻尾さながらの太く長い肉棒が、ガチガチと先端部を開閉させながら獲物へ迫る。

「ひ、い、いや……いやああっ！ 助けて……誰か、誰かああああ！」

「ヒヒヒ！ 好きなだけ泣いて喚けよ。この闇は俺だけのテリトリーだ。誰もこねえからよお、ゆつくり楽しもうぜ……お前が狂って死ぬまでなあ！」

エクリプスは影の世界に自分だけの領域を作り出し、獲物を引きずり込んで思うままに陵辱する。人の持つ欲望そのものの具現化とも言える怪人が満足するとはなく、おぞましい肉体がもたらす陵虐は、人間に耐えられるものではない。

「だ、誰か……誰か、誰か……あ、あ、ああ……ああああ……！」

日常の埒外の出来事に、愛奈は半ばパニック状態だった。ガクガクと足が震え、漏れ出た小水がスカートに黄ばんだ染みを作る。

そんな状況で彼女にできるのは、もはや祈ることのみ——そして。

「待ちなさい！」

果たして、救いの天使は、少女の祈りに応えてくれた。

「人の幸せを喰い散らす、欲望の影エクリップス！ もうやめなさい……これ以上の凶行は、貴方自身も不幸にしてしまうから……！」

闇の世界に響き渡る、凜と気高き少女の声。

それはまさに、闇の世界に差し込んだ、一筋の光そのもの。

「だから止める。わたしは、貴方を止めてみせる！」

「え…………」

「誰だ……貴様！ なぜ俺のテリトリーに入つてこられる!?!」

「わたしは欲望の影を狩るもの……そして、人々の幸福を守るもの……」

闖入者ちんにゅうしゃは、二人の声に同時に答えた。

恐怖に怯える少女には、安らぎをもたらす慈愛を。

絶望を与える怪物には、揺るぎない正義をもつてして——

「わたしはユミエル……煌翼こうよくてんし天使ユミエル！」

大きく胸を張り、高らかに自らの名を宣誓する。

真つすぐな言葉のとおり、少女の姿は、まさに天使と呼ぶに相応しいものだった。

可憐な美貌は少女らしいあどけなさを残しながらも、揺るぎない信念に凜々しく引き締められ、純粹さだけでなく強靱な意思をも感じさせる。大きなリボンでポニーテールに纏められた金髪の輝きは、目を見張るばかりに神々しい。

スレンダーでありながら、乳房や太ももにはむっちり肉を実らせたグラマラスなボディライン。天使のごとく清楚な幼貌と、大人びた媚肉をこれでもかと思わせる肢体との組み合わせは、悪魔的とすら言える魅力に繋がっている。

そんな蠱惑の美体を包み込むのは、莊嚴にして神聖な、モノトーンのボディースーツ。コート状に広がったスカートのラインは、まるでお伽噺に語られる騎士姫のようにも見える。際どく切れ込んだハイレグクロッチや、大きく開いた胸元など、卑猥とも言えるセックスアピールを魅せつけながらも、磨き上げられたその美は神性すらも感じさせるほどだ。

眩いばかりの輝きをたたえた白のスーツに、光輝のごとく走る金色のエンブレ

ーブ。随所にあしらわれた十字の意匠が、汚れなき聖性を感じさせる。その中にあつて闇のように深い漆黒の装飾が、息を呑むほどの荘嚴さを醸し出していた。

そして何より、その背から生えた十二枚もの翼——それこそが、少女のイメージを決定づけている。

輝きを放つ純白の翼と、闇色に染まった漆黒の翼。影を拒絶するのではなく受け入れた、聖性だけでなく魔性をも内包した——光と闇とが融和した、究極の姿。煌翼天使ユミエル——その名に相応しき、煌めく翼の聖天使。気高く美しきその凜姿に、愛奈もシザーエクリップスも、しばし時を忘れ圧倒されていた。

だが。

「煌翼天使……ユミエル……。噂には聞いてるぜ……貴様が影の狩人……俺たちエクリップスに仇なす、聖女気取りのヒロイン様かよ……」

長く伸びた虫の首をもたげ、ゆっくりと向き直るシザーエクリップス。昆虫の複眼は、極上の獲物を見出した捕食者の嗜虐心しぎやくに輝いていた。

「ク、ク、ククク！ 噂以上の美しさだなあ。た、たまらねえ……犯したくてたまらねえよ、グヘヘヘ！」





サイコ組織に捕らわれ  
魔物の菌床に化す魔法少女!

魔法少女  
マジカルレイン  
*Magical Lane*

うえだ

小説  
NOVEL

上田ながの

挿絵  
ILLUSTRATION

TANA

「滅ぼす……すべてを……」

それは強大な闇だった。

この世界と、魔物と呼称される化け物達が住む異世界を一つに繋げた魔王と呼ばれる存在。その身体から溢れ出す瘴気あふは、近づくだけで人の命を奪うほどの禍々まがまがしいものだった。

魔王が存在しているだけで、草木すら枯れ果て、大地が腐る。魔物達と瘴気によつて世界が侵食されていく。世界終焉の日は目前まで迫つてしまっていた。

「……終わらせない。私が絶対に守つてみせます」

魔王が出現した富士山頂を中心として、半径百キロ圏内は既に完全なる死の世界と化していた。だが、魔王の前に一人の少女が立つ。

背中の中程まで届く黒髪に、丸みを帯びた優しげな瞳が可愛らしい少女だ。名は羽衣雨音はごろもあまね。魔王と魔物だけの世界と化した瘴気の範囲に、この世で唯一立つことが出来る——魔法少女である。

「ティンクル☆マジカル——メタモルチェンジっ!!」

右手を天に掲げ、マジックワードを口にした。

光が雨音に降り注ぐ。強烈な閃光の中で、身に着けていたブレザーが下着ごと、粒子となって溶け、消えた。生まれたままの姿を晒す。露わになった、少し上向き加減のツンとした乳房は掌にちょうど収まりそうなくらいの大きさをしている。尻にもプリンツと張りがあり、太股は健康そうにムチムチしていた。肌はまるで絹のように白い。

そんな肢体を光が包む。光がそのまま魔法少女の衣装へと変化を遂げた。

胸元が大きく開いた紫のワンピース。膝上まで同色のニーソックスが覆い隠す。脚を守るのは黒いブーツだ。そうした衣装変化と同時に髪の色が黒からピンクへと変化する。そして、まさに魔女を思わせるようなとんがり帽子がちよこんと頭の上に乗った。

「魔法少女マジカルレイン——世界を闇から守るため、ここに降臨です」

雨音は魔王の前に、魔法少女マジカルレインとして降り立った。右手に握った杖を魔王へと突き付ける。

「魔法少女……お前が、我の邪魔をするものか——死ぬがよい」

魔王の身体から強大な憎しみが溢れ出す。瘴気量も増した。禍々しい力が肉体

を侵食しようとはまとわりついてくる。ピリピリと肌が痺しびれた。だが、体内への侵入は許さない。この世界に魔物が初めて出現した日——両親を殺されてしまったあの日、雨音は天に願ったのだ。父や母のような犠牲者をもう出したくない。自分のような哀しみを背負う人間を生み出さくはない。守る力が欲しい——と。その願いが天に通じ、雨音はマジカルレインとして覚醒した。その力が瘴気から自分を守ってくれている。

「こんなものは通じません。魔王……必ず私が滅ぼします！」

初めて変身した日から一年——ずっと魔物達と戦い続けてきた。戦いの中で何度も酷い目に遭わされたりもしてきた。死にかけたり、犯されてしまったり、本当に思い出さくもないような目に……。

それでも折れることなく戦い続けてきたのは、多くの人々の助けがあったからだ。実際魔物と戦うことができるのは魔法少女である自分一人。孤独な戦いだっただ。けれど、気がつけば多くの人々がレインに手を貸してくれるようになっていた。

レインのお陰でこうして生きていられる。家族みんなと一緒にいられる。だか

からこそ、自分達も力になりたい——と。

（魔王は怖い。でも、私は一人じゃない。だから戦える！ 戦えるんです!!）  
全身に魔力を漲みなぎらせる。

「おおおおおっ!!」

そんなレインに対し、魔王が収束させた瘴気をレーザーのように撃ち放つてきた。

「無駄ですっ！ 当たりはしませんっ!!」

紙一重のところでのその一撃を回避すると同時に、レインは一気に魔王との距離を詰める。

すると、主人には近づけまいとするように無数の魔物達が地中から、空から出現し、レインへと突撃してきた。

「ティンクル☆マジカル——風よ吹けえっ!!」

魔力を解放する。

ゴオオオオオオオオッ!!

竜巻が巻き起こった。強大な風が魔物達を吹き飛ばす。

「邪魔はさせません！」

「おおおおっ！」

魔王が再び吠えた。またしても瘴気を撃ち放ってくる。しかも、一発や二発ではない。数十、数百、数千の闇が一気にレインへと降り注いできた。回避できるような数ではない。

だが、避ける必要はない。

「魔法の壁よ！ 私を守ってくださいっ！！」

カアアアアッ！！

光の壁を魔力によって創り出す。向かい来る闇の槍を、すべて壁で受け止めた。その上で構えた杖に自身の魔力を収束させていく。

「いけっ！ 光の槍っ！ 魔王を刺し貫けっ！！」

シュバアアアッ！！

杖が魔力を増幅し、強烈な光を魔王に向かって撃ち放った。輝きが魔王を刺し貫く——かと思われた。

「ぬおおおおっ」

だが、あと一步というところで魔王の前に闇の障壁が出現した。

ガギイイイイイッ!!

光の槍と闇の壁が激突する。壁によって穂先ほさきが魔王に届かない。

「我は滅びなどせぬ。滅ぶはこの世界……そして、貴様だ。魔法少女」

「いいえ、違います！ 私も、この世界も滅んだりなんかしません！ 消えるのは魔王——貴方です！ はあああああ!!」

魔力量を上げる。より杖が強烈な光を放った。

「滅びぬ！ 滅びぬううっ!!」

対する魔王も噴出させる魔力量を増幅させる。それにより、光の槍が逆に押し返された。光が闇へと変化していく。魔力が侵食されていく。

「うつく……くううう」

（これ……凄い力……。想像以上です。まさか、魔王の力がここまでのものだったなんて……。あ、ぐうう……駄目。これ、駄目……）

光が闇へと染まっていく。その闇が杖にまで到達し、そこからレインの中へと流れ込んでこようとす。



(力の差が……駄目なの？　ここまでなの？　もう……無理なの？)  
心が折れかける。

だが、その刹那<sup>せつな</sup>——

『マジカルレイン——頑張っつて！』

声が聞こえた。自分を応援する声が……。

しかも、それは一つだけではない。

『届いて！ 私達の思い……マジカルレインに！』

『こうして生きていられるのはマジカルレインのお陰なんだ！ 頼む！ 神様、

マジカルレインを守ってやってくれ！』

無数の声が、想いが届く。

それと共に——

(あ、これ……流れ込んでくる……。力が……)

強い力が、魔力が身体に内側からわき上がってくるのを感じた。全身に力が充ち満ちる。魔力が増幅していく。

(凄い……。みんなの想いが私の力に……。これなら、やれるっ！)

一人ではない。みんながいる。世界のみんなが自分を応援してくれている。だから、だから、心は折れない。

「私はまだ——戦えるっ！ はああああああ!!」

流れ込んできた力を杖に収束させる。

「いつけえええええ!!」

それを撃ち放った。

カアアアアアアアアアアアアッ!!

これまで以上に強大な力が溢れ出す。光の槍が侵食してきていた闇の力を消し飛ばす。

「ば、馬鹿な！ 馬鹿なあああ!」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

魔王の身体を呑み込み、瘴気を、闇を、すべて輝きの中に消し去った。

「はあっはあっはあっ……やった……やった」

こうして魔王は完全に消滅し——

「お父さん……お母さん、私……やりました。この世界を……みんなを……守り

ましたよ」

世界は魔法少女マジカルレインによって救われたのである。

\*

——一年後。

雨音は魔王を消し去り、世界を救った。

だが、今でも魔法少女マジカルレインとして雨音は忙しく世界中を駆け回っている。魔王は消滅し、異世界とこの世界を繋ぐ次元の穴は塞がったものの、こちらの世界に侵入してきた魔物達はまだ残存しているからだ。

魔物発見の報告を受けるたび、雨音はその場に赴き、浄化するという仕事を精力的に行っているのである。

「世界を救ったっていうのにまだまだお仕事なんて、大変だよねホント」

幼馴染みの千晶が気遣うように雨音の頭を撫でてくれた。千晶は雨音がレインであることを知っている。いや、千晶だけではない。雨音の正体は世界中のほとんどの人々が知っていた。まだ魔王を倒す前の戦いの最中正体を一度暴かれてしまったことがあったからである。

それでもあまり騒がれることなく静かに暮らしていられるのは、救世主であるレインにはできる限り穏やかに過ごして欲しいというみんなの想いのお陰だ。

「確かに大変です。でも、力を持ったものの責任ですから」

「……あんまり無茶はしないでよね」

「はい」

そんなある日――

\*

『魔物を発見しました。是非お力をお貸し頂きたいです』

一通のメールが届き、雨音は現地へと向かった。場所はN県S町の外れにある山中の施設である。

「ああ！ 羽衣さんっ！」

到着するなり、一人の女性が駆け寄ってきた。

「えっと、貴女が……」

「あ、はい。メールさせて頂いた葛餅くずもち葉子ようこです。ここで慈善団体〳〵生きる資格〳〵を運営させて頂いています」

コトダマ

小妖精の  
言ってたのは  
あの洞窟ね

よっと

お優しい仙女様を襲う  
恥辱の命令！

フムム

見た事もない  
妖怪が住みついて  
悪さしている…と

仙女様あ  
お助けください！

！小妖精？  
そんなに慌てて  
どうしたの！？

ん…実は…

# 仙女 強制受胎

コトダマ言いなり夾尾実験



これ！しっかり！  
しっかりしなさい



ふあ！早速  
犠牲者が！？



気持ち悪い！  
離れっ…！！  
離れなさい！！

ひあ…何これ！  
口から触手が  
溢れて絡みついて！？



う…うが

うが…



ぐほおお



この洞窟全部が  
コイツの腹の中  
って事！？

く…ああ  
あ…っ



まさか異！！

グゲ…  
また間抜けが  
掛かった



うめえ！  
旨いなあ！

ん…あ



…つく！  
仙女である私に  
こんな気持ちの  
悪い事を！

お前がこの辺りで  
悪さしている  
妖怪ね！！



じゅるる  
うつめえなあ

グへへ仙女様かあ  
どおりでえ今まで食った  
奴で一番うめえぞお

優しい仙女様だあ  
心配無用だぞお



お前こんな事はばかり  
していると皆お前を恐れて  
居場所がなくなるわよ

そんなの全部  
食っちゃえば  
いいんだぞお

ズルリ



「何?!」



「ふあ!  
何を!」



「この立派な  
乳の仙女様も  
食っちゃうぞお  
グハグハ!」

「下賤な妖怪ね  
頭も弱そう  
最終手段として  
「調子」の服従も  
考えない」

「ぐう! 小妖精を食べて  
少しばかり力付けたからって  
調子に乗ってるわね」



「少し痛い目に  
遭わせてあげる」

「コオオオオ」

「もう! 話しても  
分からないようね」



「こ...のお!」

「ふああ! 私の  
おっぱい吸うなあ  
気色わるい」





ま…まずいい  
口を塞がれたら

んぐう！

うめえうめえ  
特に仙女様の腹ん中の  
力は格別だあ

んぐうんぐう！

格下の妖怪を縛り付ける  
仙女の力『言霊』で言う事を  
聞かせられない!!

丹田の  
仙力まで!?

嘘！なんで  
そんな簡単にな!?

ここかあ？  
ここが一番  
吸えるかあ？

そつか!!  
…こいつヒルの妖怪なんだわ  
だから仙女の私からも  
簡単に力を吸い取れるんだ

んぐう!  
んぐう!  
んぐう!

このままじゃ本当に  
マズイのに…  
力吸われて抵抗できない!!



力奪ってやったら  
お前髪の色まで薄く  
なるんだなあ

こ…こんな  
ヒルの妖怪に

くっ…  
はあはあ!



ふう…げふう  
びしょびしょびしょ

あがあ



わ…私の力  
根こそぎ  
うばわれちゃった

なんだか頭も  
すつきりだあ!



さすが  
流石仙女様の力  
凄い力だぞお

びしょびしょ

蜘蛛怪人の陵辱交尾が  
お嬢さま  
母娘変身ヒロインを  
絶望の淵へ叩き落す！

守護聖女  
ホワイトブレス  
*Guardian Saint White Breath*

小説 / でいふいと  
NOVEL

挿絵 / アイアンカー  
ILLUSTRATION

「これで終わりですっ!! 正義の力を受けなさいっ!!」  
幼く愛らしい声を高らかに響かせ、黒く巨大な存在へと光り輝く拳を叩きつける少女。

神々しさすら感じる白きレオタードとスカートに身を包む正義の変身ヒロイン。  
守護聖女ホワイトブレス。

彼女の活躍によって悪の組織『デリストピア』は壊滅し、世界に平和が訪れた。

※

日曜日の商店街は、休日ということもあり多くの人々で賑わっていた。家族連れも多く、両親に甘える子供達の笑顔が太陽のように眩<sup>まぶ</sup>しい。

「心<sup>ココロ</sup>、今日は何を食べたい？」

手を繋ぐ<sup>おやこ</sup>母親。ライトブラウンの髪を長く伸ばした、おっとりとした顔立ちの母親——白<sup>しらもりさなえ</sup>守早苗は娘の心へと聞いた。

白いブラウスに灰色のタイトスカートが落ち着いた印象を見せる、三十二歳の人妻。

娘を産んだ、女としての魅力が膨らんだ彼女。白いブラウスとブラジャーで押

さえているものの、大きく膨らんだ胸の部分はその爆乳を周囲に伝えるに十分で、男達の日を惹く存在感だ。

「えつとねえ、ハンバーグがいいなあ」

母親の問いかけに笑顔で返す、早苗と同じ色の髪をポニーテールにした心。初等部ながらに歳不相応に膨らんだ乳房が、プリントされた動物を歪めるようにTシャツを押し上げている。

可愛らしいフリルの多いスカートは早苗の趣味だろうか。活発な印象を持たせる少女が激しく動けば、隠された可愛らしい下着が見えてしまいそうだ。

「それじゃハンバーグにしましょうか。夜にはお父さんにも電話しようね」  
「うんっ!!」

幸せな笑みを浮かべる白守の母娘。家族の幸せな光景の中に足りない夫という存在。しかし二人だけでも、彼女達は幸せそうだ。

単身赴任で家を離れて中々会うことはできないが、電話で声は聞けるし、長い休みの時には帰ってきてくれる。

まだ幼い心が、会えない夫を嫌いにならないかという心配はあったが、どうや

らそれも問題ないようだった。

最愛の娘を喜ばせる為にも、今日は腕によりをかけなくてはと思う早苗が、買  
い物を始めようとした矢先。遠くの方から響く多くの悲鳴が、白守母娘の耳に届  
いた。

「まさか……心っ」

「大丈夫だよお母さん！ わかってる!!」

ざわめく人々の中で、早苗と心は人目のつかない物陰へと姿を隠す。逃げるわ  
けでもなく、強い闘志を瞳に宿した二人の身体は、光に包まれた。

※

「さあ人間共は纏まとめて磔はりつけにしてやろう!!」

蜘蛛の姿をした怪人の手で街の一部に糸が張り巡らされている。

多くの人々は逃げることに成功していたが、それでも遅れた者達が囚われてし  
まっていた。響く人々の悲鳴。絶望がその場を支配したと思えた、その時。

「そこまですっ!!」

高らかに響く女性の声。それが何を意味するものかを、その場にいる全員が理

解し、声がした方向である空へと視線が集中する。

「平和に暮らす人々を脅かす悪行は、私達がいる限り許しはしません!! 悪を浄化する白き息吹、守護聖女ホワイトブレス。参上っ!!」

悪の怪人を倒す為に天から地に降り立ったのは、輝くような銀色の髪を靡なびかせる美しいヒロイン。

白を基調とした編み上げのレオタードに丈の短い桃色のスカート。同じように編み上げのロンググローブとロングブーツ。胸元にはハート型の宝石が煌きらめいている。

凜とした口上を放ち怒りを含む表情も、本来のおっとりとした優しさを完全に隠すことはできない。

(……うう、毎回のことだけど……恥ずかしいわ……)

怪人を前にして凜々しい口上と共に現れた守護聖女ホワイトブレス。しかし内心では顔を真っ赤にして全身を抱き締めて隠してしまいたい状態だった。

成長し大人になり熟れ始めた身体。聖気で変身してのコスチュームのサイズは過去に活躍していた少女時代とほぼ変化はなく、何故か今の身体には合わせてく



れない。

たつぷりとした乳房はコスチュームの中で大人しくはしてくれずに、激しく動けばすぐにでも乳首が零れ出してしまいそうで、スカートの中のレオタードも容易く露出するだろう。

悪と戦うコスチュームのはずなのに、自身の身体の成長もあり、まるで拘束具を思わせる状態。それだけ肌の露出が多いというのは、もう三十を過ぎた守護聖女にとっては恥辱以外の何ものでもなく、人々を守る為には思っている、愛する夫も存在する中で意識しないわけにはいかない。

「悪を裁く白き心。守護天女ホワイトハート!! わたし達が来たからには悪の怪人の好きにはさせないんだからっ!!」

ほぼ同時に降り立ったもう一人のヒロイン。守護天女ホワイトハート。

ホワイトブレスよりも少しばかり身長は低くまだ学生を思わせる顔立ちだが、その豊満なボディは引けを取らない。

桃色の髪をリボンで留めてポニーテールとし、白のワンピースタイプのコスチュームが赤いフリルやリボンで飾られている。

白いロンググローブに赤いロングブーツ。そしてホワイトブレスと同様に胸元にはハート型の宝石が輝きを見せていた。

ホワイトブレスに比べれば露出はまだ少ない方であるが、それでたつぷりとした肉づきのよい身体は隠すことはできずに、コスチュームを押し上げる乳房が特に顕著だ。

しかし母であるホワイトブレスと違い、ホワイトハートは特に気にする様子はなく、ビシッと白いロンググローブに包まれた手で、怪人を指さす。

「キシキシッ!! ようやくのお出ましたな。ホワイトブレスにホワイトハート。お前達は今日ここで、このラネク様の手で終わらせてやる!!」

二人の変身ヒロインの姿を前にして余裕を崩すこともなく、蜘蛛の怪人ラネクは笑い歓迎するようにして多数ある腕を大きく拡げた。

ある日唐突に復活を果たした『デイストピア』。その怪人の一体であろう。

平和な日々を送ってきた白守早苗。そして早苗から多くの聖気を受け継いだ白守心。

ホワイトハートに聖気の大半を受け渡す結果になったが故に、戦闘力は大幅に

弱体化してしまっているホワイトブレスだが、それでも平和を守る為に戦うことを選んだのだ。

（この自信……糸で拘束している人達を人質にするつもり……？ いえ、何かあるにしてもまずは助けださないと）

今まで戦ってきた怪人達。その誰もが自分の勝利を疑わずに勝利宣言をしてくる者ばかりだった。

つまりは実力に自信があるか、何かしらの策があるかになるのだが、とにかく今は蜘蛛の糸に囚われている人を助けなければ。守護聖女はラネクに意識を向けつつも周囲を確認する。

「ハート!! 私は囚われている人達を助けるから、その間は怪人を——」

「まっかせて!! ブレスの邪魔はさせないんだからっ!!」

「糸に気をつけてッ!!」

母親の言葉を遮り一直線にラネクへと駆け出すハート。短いスカートが浮き、中の純白の下着が僅かに見えるが、それを気にせず両の拳に聖気を込める。

聖気によって成長し強化された身体。超人的な加速でラネクへと突進する守護

天女だが、単純な攻撃に対してラネクが何もしないわけがない。

「馬鹿かッ!! 真正面からくるとはなアッ!!」

まっすぐ来るだけであれば接近戦をするまでもないと、ラネクが牙を持つ口から強力な粘性の白い糸を放射線状に放ち、ホワイトハートを擲め捕らんとする。

そのまま直進すれば、守護天女の身体は罠にかかった餌のように蜘蛛の糸に拘束されるはずであった。

「何イツ!?!」

しかし、ホワイトハートはスピードを緩めることもかわす素振りも見せなかったと思えば、急にラネクの視界から消えた。

いや消えたのではない。糸が拡がり切る前にと身を低くして、スライディングの要領で回避しながらも蜘蛛怪人へと接近をしたのだ。

「やあああああつ!!」

勢いでスカートは完全に捲れ下着を露出させながらになってしまっているが、ホワイトハートは両手を地面につけて体勢を変え、ラネクの身体の中心へと目掛けて脚を揃えた状態で蹴りを放つ。

ついに堕ちた元対魔忍と  
現役対魔忍!

# ママは対魔忍

MAMA WA TAIMANIN

乳が膨らむ熱クソ

最終話

ママは対魔忍  
孕み堕ちる幸福クソ

闇の欲望渦巻く物語が  
迎える結末は?!

前回までのあらすじ

家族の目を盗んで健也とのセックスに興じていた加奈。すっかり快樂ジャンキーの彼女は健也主宰の公開調教ショーに案内され、そこで夏鈴がふたなり凌辱されている様を見る。さらに加奈、夏鈴、健也による公開3P背徳セックスも行われ、対魔忍二人は健也の牝奴隷へ成り果てるのだった。

小説  
NOVEL

あらいのゆう  
新居佑

挿絵  
ILLUSTRATION

えれ2エアロ

ブラックリリス

原作  
ORIGINAL

Black-Lilith

引退した対魔忍たちの失踪事件――。

その結末は、美しき正義の現役対魔忍と、麗しき美熟女引退対魔忍の公開完全敗北凌辱で幕引きを迎えようとしていた。

「ひい、んほおおおつつつ！ ギモヂイイッツ！ 私い、対魔忍の杉田夏鈴はあつ！ ク、クズの皆様にいいつ、めちやめちやに犯していただいて、最高に幸せな牝豚でしゅううつつ！ おつつふおおおおんつつ！」

夏鈴、そして加奈の完堕ち宣言生配信から、すでに数時間が経過していた。

己の信念を快楽に屈服させられた二人の対魔忍は、今まさに、牝の熱気と牝の肉欲が絡み合う、淫らな輪姦セックス快楽の只中であつた。

高解像度カメラを自身に向けられた夏鈴が、その魅惑のハスキーボイスを野太い牝豚の嬌声きょうせいに変えて、自らのビッチドM性欲を、アングラ動画サイトに生配信し続ける。

（ほくく、おほおおつつ！ カメラで撮られるの気持ちイイッツ！ ゴミのよ  
うな連中に、私の輪姦姿がチンポオカズにされてるなんて……ドMマンコに、キ  
ュンキュンくるふううつつ♡ 何時間でも犯されまくれるううんつつ♡）

かつて優秀な対魔忍であった夏鈴が、リングの外で、男たちに輪姦されながら、牝の絶頂と、媚びた肉欲の声の卑猥な演奏を奏でる。

牝奴隷ボンデージは、より対魔忍としての敗北感を視聴者と凌辱者にアピールするために、夏鈴が着ていた対魔忍スーツのレプリカに着せ替えられている。

そんな屈辱的な状況にあつて、しかし夏鈴は、対魔忍という、世界でも最上級の牝を前に、野獣の本能を露わにした数人の男たち、そして撮影カメラに囲まれた中、突き出された勃起肉棒を、自らの意志でむしゃぶり、舐め尽くしている。

「ふじゆるぎゅううっ！ んぶんつぶうううっ！ おほおっ、チンポおおおっ！ 悪党のチンポおいししゆぎりゅううっ！ たまらないっ、チンカスの臭いと味が、たまんないりよほおっ！ イクイクウウツツ！ 死ぬほどイってりゅうううっ♡」

「ふははっつ、私たちも最高に気持ちいいぞ、夏鈴っ！ クソ生意気な対魔忍に、チンポをしゃぶらせるなど、滾りすぎてしょうがないっ！ 高級娼婦相手でも、絶対に味わえん快感だなっ！」

「対魔忍を犯すのは、我ら全員の夢ですからなあ。この鍛え上げられながら、ム

チムチとした媚肉など、まさに対魔忍だからこそっ！ おおっ、女体にチンポを擦り付けているだけで、マンコ以上の気持ち良さですよっ！」

闇の商売で悪どい金を稼いでいる男たちが、その汚れた肉欲と猛るペニスを、夏鈴の豊満極まる女体のすべてに、擦り付けてくる。

二十代半ばという、女盛りの柔らかい肌と、対魔忍らしい鍛えられた筋肉。その絶妙なバランスで彩られた肢体が、無数の肉棒からの快樂に、ビクビクつとわななき、打ち震える。

「くくく、この変態め。そら、もつと気持ちよくしてやるっ！ お前の大好きなキメセクを、たっぷり味わえ対魔忍っ！」

ブシユウウツツ！ ズブツツ！ ズブウツツ！

「おっほおおんっつ！ 強壮媚薬キックウウウツツ！ チンポとマンコに思いつきりギマっつでりゅふううっつ！ キメセク最高うっつ！ もつと犯して……っつ！ 牝対魔忍をもつと……もつとイギ狂わしえてくらひやいいいんっつ

♡」

自らを完全に墮とした魔性の発情クスリを、追加で何本も打ち込まれた夏鈴は、



一万倍を超えている感度を、さらに鋭敏な牝快楽に上昇させる。

男たちの罵倒がもたらす吐息ですら、絶頂への引き金となり、周囲を取り巻く牝と牝の濃厚な汗の香りが、思考を快楽の底無し沼へ沈めて帰さない。

「あはっ、すっごくエッチな顔っ♪ 夏鈴は、DMの本領発揮だね。くっ、でもこっちはもつとすごい……っ。はあはあ、加奈オバサン、がつつきすぎ……いくら僕のペニスでも……くううっつ！」

パンパンっつ！ ドチュドチュンッツ！

男たちに犯される夏鈴とは対象的に、リングの上では、引退熟女対魔忍・加奈が、健也けんやの腰に跨またがり、汗とザーメンまみれでムレムレの赤い対魔忍スーツ姿で、自ら激しく腰を上下させ、脳髄まで響き渡る、淫紋完堕ちセックスに、ハマりきっていた。

「んっほおおんっ！ なに弱音言ってるんですか、健也様……ご主人さまああっ！ 私みたいな、引退対魔忍の牝心に火をつけたのは、あなた様なんですよおっ!? き、気持ちイイッツ！ 淫紋セックス気持ちよすぎるわあんっっ♡ ご主人さまのチンポおお、太いい、硬い、熱い……逞ましいいいっ！ 慎吾しんごさん

の貧弱チンポなんか比べ物にならないのほおんっ♡ ご主人さまとのセックスこそ、私の心が、本当に求めていた快樂うんっっ♡」

強い照明でライトアップされた加奈の大きな尻が、鍛えた対魔忍の膂力りよりよくにより、AV女優など比ではない速度と重量感で、グングウンッ！ と激しくアッパダウンを繰り返す。そそり立った健也の剛直を、ズチヨンズチヨンッ！ といやらしさ全開でくわえ込み、騎乗位快樂にのめり込みながら、熱い発情汗の飛沫しぶきを飛ばす。

加奈と健也の不倫現場を見せつけられた、慎吾と悟さとるは、加奈が完墮ち宣言をしてからすぐに、その淫らに墮ちきった声で、健也をご主人さまと呼びながら晒すアクメ顔に、精神が耐え切れず、気を失ってしまっていた。

心優しい妻であり母親であった加奈は、しかしそんな二人になど目もくれず、自らを墮とし、幸せな家庭を崩壊に追い込んだ少年に、積極的に抱きつき、数時間わたに渡るセックスを、野太い牝声で悦びながら続けている。

年上としてのプライドを捨て、発情した牝猫のような甘い声で、健也をご主人さまと呼びながら、快樂にヨがる。

「全部バレちゃって、完全に素直に……本当の幸せに気づいたみたいだね、加奈オバサン。うん、そうだよ。オバサンを幸せにできるのは、オジサンや悟じゃない。僕だ、僕のチンポだけが、加奈オバサンを女として、最高に気持ちよくしてあげられるんだよっ！ はあ、でもすごいっ。予想以上だよ。加奈オバサンが、本気の対魔忍がこんなにエッチだったなんて……っ」

加奈に跨がられた状況で、少年は気持ち良さに耐えかねるように、うめく。

淫気を操る才能にあふれた健也の精力は、通常の男性の十倍を遥かに超える。そんな絶倫ペニスの持ち主に、苦しげな声を漏らさせるほど、家族への愛情と対魔忍の誇りのすべての枷を解放した加奈の性欲は、まさに飢えた牝の獣のごとき、すさまじいものとなっていた。

「そう、そうなのよおっ、ご主人さまあんっ♡ 慎吾さんと悟に不倫現場を見られて、私い、本物の牝になったのおおっ！ ママだからって、対魔忍だからって隠してきた、これが本当のエロエロな私いいんっ♡ 感度3000倍でもお、淫紋刻まれても、幸せええっ。一生マンコに、ご主人さまチンポ突っ込んでいたいっ。吉沢加奈よしざわは、家族を裏切って欲情する、淫乱ママ対魔忍よおおんっ♡」

加奈がドチュドチュッ！ と沸騰する牝本能に任せるままに腰を振り、甘い欲情の声を漏らす。

舌を垂らし、快樂に潤んだ瞳。頬は赤く染まり、カメラに向けて、鍛え上げ、発情しきった本氣対魔忍セックスを見せつけている。

パンパンッ！ ズンズチュウウッ！

（あなたあ、悟う。これがママの本性なのよ……っ。もう私、健也さまのチンポなしじゃ生きていけない……っ。あなたたちを失望させたときの、あの気持ちよさあ。もう絶対に忘れられないのほおんっ♡）

健也の姦計により、愛する家族にすべてを暴露された加奈は、全身を迸る背徳快感によつて、完全に快樂の虜へ、その熟れた身体と高潔な心を墮としてしまった。

家族という最後の心の支えが、強烈な快樂の源泉であることを刻み込まれた、熟女対魔忍の心は、もはや一匹の牝豚としての欲求を抑えることはできない。

赤い対魔忍スーツを着ながらにして、何時間も少年に跨がって、尻を激しく振りたくり、絶頂し続ける様は、人妻対魔忍の秘めたる肉欲として、アングラサイ



もう泣くなよ

うえええ……

だってえ……

また髪の毛のこと  
からかわれたの……

大切な人との  
優しい思い出……



気にするなって

俺は好きだぞ  
この髪

……ほんと？

うまいか？

ほう

うんっ

きら★キラ★  
KIRARA★KIRARA  
THE COMIC  
NTR  
魔法少女は  
変わっぴや……

5話



行くぞ  
きょう

あまみや  
雨宮ミズキ

さかき傘  
ORIGINAL

キャラクター原案  
希望つばめ  
のぞみ

うんっ  
タダシくん！

タタシッ!!

おそけりっ…  
あと  
5分だけ…

おーきー  
なーさい!

早く着替える!



んあ…

あたダシ

飴持って  
ない?

朝から  
喉が痛くて



ん

やった  
莓ミルク♪

甘いもの好きは  
変わらないか



今日は12月17日

冬休みまで  
あと3日

そしてもうすぐ  
クリスマスだ！

今年はサンタさんに  
なにももらおっかな

ピクーン

もらうばっか  
じゃなくて  
あげるほうも  
考えとけよな

10日後だぞ

なんだっけ？

ブコッ

俺の誕生日だよ！

わっ

ふふっ  
わかってるって！

おはようー

きんら  
ちゃん

こっち来て

ダッ

…なんの音だろ  
ケータイ？

ググググ…

あのね

来週  
クリスマス会が  
あるでしょ？

アキラくんが  
夜も集まろうって

キャ

キャ

12月24日

星宮第一学園では  
クリスマス会が  
開かれる予定だ

クリスマス会  
アメ？

参加は自由の  
ちよことした  
お楽しみ会だ

夜も遊ぼうって  
誘われちゃって

佐山くんがいなきや  
行きたいんだけど…

タタシと  
過ごせばいいアメ

え

幼なじみと  
クリスマスを二人で  
過ごすなんて  
変なことじゃないアメ

最近  
マカイジュの種も  
大人しいし

平和な時は  
平和を楽しむ  
アメよ

ポポポポ

POTATO



魔法少女として  
戦い始めて4ヶ月



ふんやめめ...



マカイジユの種は  
敵である  
キララを警戒して  
活動が大人しかった

種は活動を控え  
成長しなければ  
やがて根腐れを  
起こすらしい



だいでよーぶ  
アメ!

種は發動したら  
必ず瘴気を出す

エマに  
見抜けなはずが  
ないアメ!

それより  
さっさとタタシに連絡  
取ってみるアメ〜!



ううん...

12月24日

へー夜は  
タダシと

えへへ  
ライちゃんも  
来る？

行かねーよ

幼なじみがラブラブ  
してるところに  
乗り込みたくないし

ラブラブなんて  
そんな…

チラッ

ん？

…あれ？  
なんだろ…

…宮代  
来たんだ

チラッ

お腹が変…？

皆さん  
集まって  
ますか？

はい





それでは  
クリスマス会  
スタートです！



くわっ  
ひびく……っ！

うう……う

さてここからは  
自由時間です

みなさんにか  
やりたいことは  
ありますか？

先生



は？  
ホフ……



は？  
ホフ……



いい  
アイデアね

前せとに出でて  
瀬戸内せとうちさん

みんなにあなたの  
ケツ穴けつあなを見てもらい  
ましよう



クラスの女子が  
アナルマツの顔に  
なっています

ズッ

このあとは  
女子のアナルで  
遊ぶのがいいと  
思います



ざわ

は

は

え？



はいっ

ふふふ  
素敵すてきな肉便器にくべんきに  
仕上しあげがったわね



瀬戸内せとうちさん  
エネマグラなんて  
使つかってるのね

それじゃあ  
それをひり出して  
みましようか



なにか  
おかしい…？

他のみんなは  
どうかしら？

私も  
私わたしも…です！

カッ



変身元了!

でりやあ  
あああ  
っ

マジカル☆  
キララ!



ま待って  
みんな  
おかしいよ!

エマ!



どーしたアメ  
瘡気は  
出てないのに...

ポ  
ン

ソク...  
いいから  
変身!



おたのしみ...



遅いよエマ  
瘡気を感じたら  
すぐ来るって  
言ったのに

へ?

ガ

ガ

おたのしみ!?

宮代くん！  
あなたでしょ  
今回の「種」は！

マカイジユの種が  
起こす騒動はいつも

「種を持つ者の  
願望を実現させる」

女の子のお尻に  
おかしな物を入れて  
それを発表させる世界…

こんな願望を持つのは  
生粋のお尻フェチである  
宮代くんくらいだ

すぐ  
終わらせる  
から！

ふんぬ  
——っ！

孤高な狩人の存在意義は、  
魔蟲の繁殖オナホのみ！

# 孤高の狩人 エリア

侵略、屈服、幼蟲出産

小説 くろいっぴみ 黒井鶴

挿絵 ビッグシャイン

人間が誰一人として踏み入った様子のない、草木が鬱蒼うっせうと茂る深い森の中で、まるで地面が震えているかのような、低い唸り声が響く。

「グルルルルルルル……」

いかにも狂暴そうな唸り声を上げているのはヨロイイノシシだ。ヨロイイノシシはその名の通り、鎧のような重厚で分厚い外皮に覆われている、ピンからキリまでいる猪の中でも、特に大型で狂暴なことで知られる種である。

「フン、フン、フン、フン……」

どうやら餌を探しているらしく、木の根元を執拗しつように嗅ぎまわっている———と思っていたその次の瞬間、いきなり嗅いでいた木に向かって、猪は思い切り体当たりをかました。途端に木の堅い皮がベリベリと裂ける音が森中に響き渡る。

ベキベキベキッ！ ザザザーッ……ベキベキ、ベキベキベキッ！

何百年もの年月を経ただろう大樹は根元からボキリと折れ、枝同士がこすれ合いながら大きな音を立て、土煙を上げながら地面へと激突した。

ギヤア！ ギヤア！ ギヤア！ ギヤア！ ギヤア！

高くそびえる木々の上を、危機を素早く察知した鳥たちが、鳴き声を上げなが



ら上空へと飛び去っていく。

しかしそんなものを意に介すようなヨロイイノシシではない。猪はへし折れたばかりの新鮮な幹の残骸に顔を突っ込んで、中の青く柔らかい部分を、牙の生えた大きな口でムシヤムシヤと食<sup>は</sup>み始めたのだ。

猪は一般的に草食であるが、この巨大な猪は、自分よりも巨大な樹木の特に柔らかいほんの一部分を強引に食べてしまうのだ。

「ガフツ、ガフツ、ガフツ……」

折れて木皮が剥<sup>は</sup>げた所に顔を突っ込んで、猪は尊大な食事を始めた。樹液が漏れる繊維質を、次々に口の中へ押し込み限界まで頬張って、顔を上げてからよく咀嚼<sup>そしやく</sup>する——そんなことを何度か繰り返していた時であった。

——バシユツ！「ブモオオオ！」

猪よりも高い場所から放たれた矢が、ヨロイイノシシが見開いていた眼球へ上から下にぐざりと突き刺さったのである。いかに全身鎧のような外皮に覆われているといえども、流石<sup>さすが</sup>に眼球を射られては、猪も食事を止め暴れた。

「ブギユツ、ブギユウウーッ！ ブギユーッ！」

——そんな風に声を荒げて暴れるイノシシの上へ、無謀にも飛び乗った者がいた。彼女は高い木の上から、猪の背目掛けて飛び降りたのである。

皮の外套に身を包んだ彼女は、暴れる猪の背に跨つて、振り落とされないように猪の外皮を手袋をした手でぎゅつと掴んでバランスを取りながら、髪から細く飛び出た長い耳を震わせて辺りを警戒している——そう、耳が人間よりも長く、肌も土のように浅黒い。人間族でないことだけは確かだ。

「ッ——」

亜人の女は背に張り付いたまま、背負った矢筒から一本矢を取りだし、矢が刺さっていない方の眼球を目掛けて思い切り矢を振り下ろし、眼球に突き刺す！

ドズッ！「ギイツ！ ブ、ブギイイイイツ！」

両の目を齧で刺され、流石のヨロイイノシシも声を上げざるを得ない。

背に乗った感触と目の不快感に、猪は前両脚を何度も持ち上げて背から女を振り払おうと必死だ。だが女も負けじと猪が纏う鎧に必死にしがみつく。

「ギッ、プギイツ……！」

だがしばらくすると、あれだけ暴れていたイノシシが段々と大人しくなり、つ

いには膝を折り、その場に蹲うずくまってしまった。

——先ほど眼に打ち込んだ鏃には毒が塗り込んであり、動き回れば動き回るほどその毒が身体中に回って、昏睡状態になってしまふのだ。

「  
」  
女は猪の挙動が完全に止まったのを確認してから、何も言わずに背から降りると、腰に下げたナイフを鞘から抜き、首元の鎧の隙間にある柔らかい外皮に突き刺した。毒が効いている猪はその女に歯向かうこともできずに、その刃を無抵抗で受け入れるしかない——

——ザクツ！ ジャクツ、ザク、ザク、ザク……

女は長い時間をかけ、自分の胴ほどの大きさの猪の首を綺麗にすっぱりと落とし、持ってきた革袋に詰めてそれを背負うと、その場を静かに後にした——

※※※

誰も立ち入らぬ森の奥深く、そのエルフの里は存在した。多民族との交流や発

展した文明を拒み、古来からの暮らしを行うエルフだけで暮らす隠れ里である。住人は古くからの仕来たりを忠実に守り、敬虔けいけん且つ質素に暮らしているために、騒動らしい騒動などほとんどない。だが常に静かであるはずの里の中は、俄にわかに喧騒を帯び始めていた。

「おい見ろよ、ダークエルフだ……」「まだ生きていたのね、恐ろしい……！」

「あの袋、血が付いてるわ、汚らわしい……！」「ママ、怖いよお……」

「なんちゆうモンを村に持ち込んできとるんじゃ！　ダークエルフめ！」

「里から出て行ってくれないと、おちおち洗濯もできないじゃないの……」

女が里の奥へと近づく度に、家の窓や入り口の影から日向から、自分の肌色とは違う彼女に対して、エルフたちから忌諱きいの言葉を浴びせられていた。

「ッ——」「ヒィッ！」「こつちを見たぞ！」「呪よちわれる……！」「ッ——」

しかし、罵詈雑言を向けられている彼女が一度囁ささく人々の方向を振り向けば、恐怖からそそくさと逃げていった。それほどまでに彼女は畏怖され、忌々しい腫物のような扱いを受けているのだ。

しばらく里の中を進むと最奥さいおうに、見張りが二人もいる住宅があつた。

「エリアです。ヨロイイノシシを狩った報告に参りました」

落ち着いた声でエリアと名乗った彼女は、背負った袋を正面に掲げる。

「……フン、本来ならば里長さとおさをダークエルフなどに会わせはしないのだがな」

「ダークエルフめ、里長に何かあれば我々が承知しないぞ……！」

苦々しげに呟くと、見張りの二人は渋々不快な来訪者を里長の元へ通した。

進んだ先には、穴が開いただけの剥むき出しの天窓がある大広間があった。その奥に、老エルフが険しい顔で座椅子に腰かけている。

老いが遅いはずのエルフでありながら深い皺が刻まれているその顔は、彼が生きてきた永い永い年月をそのまま示しているかのようだ。その老エルフの前で狩人は片膝を地につけ、報告を始める。

「里長、ヨロイイノシシを狩ってま——」

「そんな血に穢けがれた物を、村に持ち込むではないわ！」

彼女が話し出そうとしたその時、言葉を発するのを遮るように里長は怒りを孕はらんだ声で叫んだ。しかしエリアは顔色一つ変えない。毎度のことだからだ。

「獣の血をこの里へ持ち込むなど、言語道断！ 里を忌いや地にする気かッ！」

目を見開き、口角から泡を飛ばさん勢いで怒鳴りつける里長には、危険な獣と戦ってきた狩人であるエリアへの労いや感謝の気持ちなど微塵みじんも感じられない。

「……お言葉ですが里長、以前カンムリグマを狩って証拠に爪を持ってきた時は、『本当に狩ったか怪しい』と言っていたではありませんか」

「誰も首を取ってこいなどとは言っておらぬ！」

怒髪天のまま、里長は目の前のダークエルフを指さして続ける。

「そもダークエルフがこの里に生まれたせいで、この森に災い起きておるのだぞ！ お前が生まれなければ、猪も熊も出ることはなく、里から死人が出ることもなかったのだ！ それを分かって言っておるのだろうか！」

——里長の言い草はあまりにも理不尽な理屈であった。だがしかし、古くから『災い呼び寄せる』といひ伝えられているダークエルフに対して、エリアが今まで出会った全てのエルフは同じような感情を持っているのだ。

「——申し訳、ありません……」

エリアはただ静かに、しかし胸には確かに不満を募らせながら謝罪する。

「謝るなら、さっさと森に帰るがよい！ ダークエルフが長居するでない！」

だがそんな行為を里長は——否、この里のエルフたちは誰一人として望んでないなかった。彼らが望むのは一刻も早く平和な里から消え去ること。

「……………」

エリアは素早く踵<sup>かかと</sup>を返し、里長の視界から風のようにいなくなった。

「フン、困ったものよな、ダークエルフは……生かしておけば我らに災いを呼ぶ、かといって殺せば奴の血によって森や里が穢れる……厄介極まりないわい」

そう言つて心底面倒そうに、老エルフは暗い溜息をついた——

一方そそくさと森への帰り路についたエリアは、ふとある住居に目が留まった。十の時に里を追い出されるまでの、里の唯一の記憶。もう百何年前になるだろうか、エリアは両親と共にこの家に住んでいたのだ。

（ここに、私の親が住んでいるんだ……）

生まれた瞬間から里を追い出されるのが決まっていたエリアは、十で成人するまで、追い出された森で死に、災いを恵みの森でまき散らさぬように、最低限の生き残る知恵をこの場所で学ばされたのだ。

忌み子として、同情もされることなく、恐れ疎<sup>うと</sup>まれながら教育を受けさせられ

たこの場所に、いい思い出なんてまるでない。けれど里で一番の思い出があるこの場所は、エリアがどうしても立ち止まってしまふ、唯一の場所だった。

「ッ……！」

脚を止めて住宅に見とれていたエリアは、窓からこちらを見ている視線にしばらく気が付かなかつたが、自分に冷たく突き立てられた『それ』に気づいて自分の視線をそれが刺さる方向へと目を向けた。

「」

（お、かあ、さん……）

壁をくり抜いただけの武骨な窓の奥から覗いていたのは、エリアを産んだ実の母であった。しかし、その視線は愛情に満ちた母親の物ではない。まるで腐った死肉に湧いた蛆でも見ているかのような、不快極まりないという表情だった。

当然のように、自らの胎はらを痛めて産んだ彼女でさえも——否、自分の胎から生まれ出た存在だからこそかもしれない——この里に生きるエルフ同様に、ダークエルフのことを疎さげすみ蔑あざむんでいたのだ。憎しみに満ちた視線が、娘に突き刺さる。

「ッ……！」



可憐な巫女たち受ける  
絶望の異形交配!!

ご依頼された  
村の方ですね

おお  
ありがたや  
ありがたや

御山から  
参りました

宝仙院 栞と  
申します

この村は  
大昔から

山のヌシに  
生贄を捧げて  
きましただ

だどももう  
そんな罪な事  
したくねえ

村さ  
お救いください

ご安心  
ください!

化物退治は  
我ら退魔巫女の使命で  
ございますゆえ

必ずや成し  
遂げましょう

# 退魔巫女 宝仙院 栞

ほうせんいん しおり

## ~怪物の母嫁にされた聖女~

漫画 / ぱふえ  
COMIC

丑の刻まで  
家でゆっくり  
してください

さ  
どうぞ  
どうぞ

しかし…  
女性が一人も  
見たらぬ

「ご」まで  
なる前に

我らを頼れば  
良いものを

お荷物  
お持ちします

化け物など  
ではない



悪神!  
神...

こんな人の  
少ない村に  
神が居着く  
だなんて



神属が相手と  
知っていれば

相応の用意を  
したものを!!



く

これは



悪神と  
言えど神

やはり  
普通の刃では  
斬れぬな

なんと早い  
再生か

ならば  
こちらも

神の力を  
以って  
お相手いたし  
ましょうぞ

カッ  
カッ  
カッ



# 神劍 抜刃



乱暴な  
鎮め方で  
悪いが

さ……

あとは封印  
するだけ……

護符が  
無い!?

!!





ああッ

ぐっ  
重...

おどまな  
...ない!

離れて!!  
く...う



この体液の  
臭いは  
毒か!



それはでき  
ませんなあ

又シ様を  
封印するなど全く  
とんでもない



手遅れに  
なる前に

あなた!  
符を  
投げて!!



力...が

抜けて



そんな...  
この村の  
全てが

おうおう  
ヌシ様は  
その乳を  
気に入られた  
ようじやな

異形だった  
とは...

我々は子を  
成せませぬ

こんな  
淫らな気持ち  
が  
昂るわけがない

おかしー!  
胸を少し  
揉まれた  
程度で

ねばねばして  
気持ち悪いっ

なので  
ヌシ様に  
村人を  
増やして  
もらって

この村は  
成り立って  
おるのだ

の...こ...

あぁ

んっ

や...

んん♡

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん



生贄を  
食べるの  
ではなく

にちあわ

そういう  
ん♡  
かあッ

なら  
この体液も  
体臭も全てが

媚毒!?

いけない…  
このままでは

これが  
情欲…なのか♡

や…ああ

ひやめ♡  
むねええ  
えええ♡

本当に…  
生贄にい

媚薬清け!?

これ以上  
されたら…♡

あああッ

悪神の供物に  
されてしま…

も…おお  
舐めるな  
あ…あ♡

変っ  
胸の奥で  
何が起きて

あああ♡  
あああ♡  
あああ♡





だめだ

気をしっかりと  
保て!!

淫らな刺激に  
流されなければ  
どうにか...

なッ  
待て!!

ンゼ

ンゼ

ンゼ

そこは

ハハ

ハハ

ハハ

ハハ

だめっ  
挿れる...

な...あ

だめえ  
だめッ  
そこだけは

ど...うして  
こんんなに♡

弄られてる  
だけなのに

気持...ひ  
いわけ...

ハハ

ハハ



# 魔王女帝 シキア

hacia

～ 孕み、産む 快樂～

異形に囚われの女帝は  
戦士から雌へと成り下がる……

小説  
NOVEL

みねさきりゅうのすけ  
峰崎龍之介

挿絵  
ILLUSTRATION  
くろ  
黒シチ

「ひとりか」

大男が放った重々しい声に、レイシアは笑顔で応じた。

華やかな、ただし穏やかではない微笑びしょうだった。彼女の凜とした美貌びぼうを彩るのに相応しい、どこか好戦的な微笑み。

「オレの隊を相手にするというのは、出迎えがたったひとりとは。ふん、舐められたものだな」

大男——否、獅子の頭と尋常ならざる巨軀きよくを持つ獣魔族は、『ひとり』という部分をことさらに強調した。目には侮りを嫌う光がぎらぎらと輝いている。また彼の背後に整然と並んでいる数百に上であろう屈強な獣魔族たちも、けして友好的ではない視線をこちらに向けていた。

「ふ」

と、レイシアは笑みをわずかに深め、純粋な魔族特有の角をそっとひと撫でした。

「舐めてなどいないさ。むしろこれこそが、貴様に対する最大の礼儀だ」  
「なに？」

グンディズは怪訝けげんそうに片眉を震わせた。それを真正面から見返して、レイシアは歌うように言う。

「この私——レイシア・バルドマルゼ自らが、貴様の道を阻む。これ以上の誉れは他にない。……そうは思わんか、デimosの勇将グンディズよ」

「——ほう」

グンディズは一瞬、驚いたような表情を見せた。だがすぐに獐猛じょうもうな笑みを浮かべて、右手に握った巨大な戦斧の石突きで、足下を——無限とも思えるほど果てしなく広がる、魔界の大地をひと突きする。

「レイシア・バルドマルゼ！ クレイランの女帝が自ら出陣とはな！ あのちつぽけな砦がそれほど惜しかったか？」

グンディズは戦斧の切っ先でレイシアの背後を指した。そこには城壁のあちこちに綻びを抱えた砦がある。グンディズ隊の猛攻で陥落寸前まで追い込まれた、クレイラン自国の砦だ。

「まさか。貴様も知っていよう。この砦を失ったとて、クレイランにさしたる損害はない。私はな、グンディズ。貴様に用があつて、わざわざ足を運んだのだ」

レイシアはゆつくりと腕を掲げ、獅子將軍の猛々しい顔を指さした。すると獅子の顔に、どこか好戦的な表情が浮かぶ。

「ほう。クレイランの女帝がこのオレになんの用だ？」

言いながらグンデイズは静かに、傍らの戦斧を握り直した。その様子からすると、既に『なんの用』なのか察しはついているようだったが――

「無論、貴様と戦うことだ。『鑿殺おうさつのグンデイズ』と呼ばれた貴様の力、どうしても直に見ておきたくてな」

「……好戦的なことだ。一国の主あるじとはとても思えんな」

真面目な調子で笑うグンデイズ。だがレイシアは薄く笑って、

「――だが、嫌いではないのだろう？」

「――ふ、くく。ガーツハツハツハツハ！」

勇猛たる獅子將軍は巨軀を揺すって大笑した。そしてその大笑こそが、問いへの返答に他ならなかった。

「――者ども！ この戦いには一切手出し無用！ そこから一步でも動けば、このオレ自ら首を刎ねてくれる！」

グンディズが巨大な戦斧を掲げ、叫んだ。すると背後の部下たちがその場にどすんと座り込む。なにがあつても手は出さないと態度で示しているのだろう。上司の性格は先刻承知ということか。

「いい隊だ」

レイシアは応じるように、体をすっぽりと覆っている深紅の外套マントを取り払った。美しく整った赤銅色の肉体が惜しげもなく晒される。薄布に隠されている乳房は大きく、また形もよい。腹はうっすらと腹筋の形が透けるほど引き締まっているが、尻には媚肉がみっちり詰まっついていて、女性らしい曲線を描いている。多様な種族が棲まう魔界にあつて、誰もが美しいと感じる完璧な肉体だった。

もつとも——これは当然のことだが。彼女の肉体は、ただ美しいだけではない。一国を統治するに値する棘が、その体には秘められている。

「ハアアアアアアッ！」

レイシアが気合いの咆哮ほうこうをひとつあげると、彼女の体から凄まじい密度の魔力が噴き出した。その膨大な魔力はそれ自体に意思があるかのように自ら収束し、美しい褐色の肢体に絡みついていく。



『呪炎じゆえんの羽衣』。練り上げた魔力を呪いの炎に変質させて身に纏まとう、攻防一体の奥義だ。力が全ての魔界において、彼女を『女帝』たらしめている最大の根拠でもある。

「ほう……これが『呪炎の羽衣』か。噂には聞いていたが、なるほど。我がディモスの精鋭たちが手こずるのも頷ける圧力よ……」  
ブレッシャー

「臆したか？」

大戦斧を握る手を震わせてグンデイズが呟くのに、レイシアは心にもないことを告げた。すると獅子將軍は豪快に笑い、

「グハハハハハ！ 許せよ女帝！ これほどの敵と相まみえるなどそうないこと！ 武者震いが止まらぬのだ！」

「ふ、だろうな」

呟くように応じて、レイシアはにやりと笑った。そして――

「では始めようか。――鑿殺のグンデイズ！ その力、余すことなく私にぶつけてみせよ！」

「応！ ——クレイランの女帝、レイシア・バルドマルゼ！ 相手にとって不足

なし！」

女帝が命じ、獅子が吠えて。

死闘が始まった。



「——ということがあつてな。少々苦戦したが、グンデイズを討つてきた」  
レイシアがそう伝えると、出迎えにきた臣下たちがぼかんと口を開けた。

そこはクレイランの首都アイルナカタ、その中央に位置する城だった。無骨な装いの、財に興味を示さないレイシアらしい城である。

「どうした。ひと仕事を終えた王が帰還したのだぞ。劳いの言葉のひとつくらいあつてもよからう？」

ひびます  
跪くことも忘れて立ち尽くしている臣下たちを、順番に見回す。海軍のトップであるメタナス。最近空軍を率いるようになったイズイル。財務をほとんどひとりで背負い込んでいる老臣カナタメレ。そしてもうひとり、レイシアの身の回りの世話を一任されている女中のクロンもいる。レイシアが普段から重用している連中は、概ねここに揃っているようだった。

「あとう……」

と、ややあつて。おずおずと手が上がった。この中では比較的若いイズイルだ。自慢の翼をなぜかふるふるさせている。

「なんだ、イズイル。申してみよ」

「は、では。……その、陛下の後ろに、もの凄く焦げている物体があるのですが……それはもしや？」

彼がそう言った瞬間、他の連中が一斉に拳を握った。よくぞ訊いた！ とも言いたげな動作である。もつとも、場の空気が妙に重苦しいことに気づいていないレイシアは、まるで頓着とんちやくしなかつたが。

「ああ、これか。グンデイズだ。かなり本気でやったが燃え残ったのでな。気に入ったので連れてきた」

「……そ、そう……」

そうですか、と言いたかったのだろう。イズイルは途中で言葉を失ったようだった。レイシアは齒切れの悪い返事に首を傾かしげたが、さほど頓着せずとんちやくせずに肩をすくめた。

「口説き落とせれば最高だが、そうでなくとも捕虜としての価値は高い。解放を条件にディモスに迫れば、それなりのものをふんだくくれるだろうさ。……さて。立ち話もそろそろ飽いたな。イズイル。グンディズの世話はお前に一任する。武人肌のお前なら多少は気が合うだろう。きちんと治療を施して、可能であれば口説き落とせ」

「は……ははっ。このイズイルにお任せを！」

「うむ。ではこの場は解散とする。各々、役目に戻るがよい」

レイシアが命じると、臣下たちは困惑しつつも敬礼をし、ぱらぱらとその場をあとにしていった。そして最後に残ったひとりに、レイシアは改めて問いかける。

「クロン、湯浴みの支度は？」

「できています」

即座に応じたのは女中のクロンだった。階級で言えばこの中で最も低い——というかないに等しい——が、レイシアと最も親密な人物でもある。将や大臣が並ぶ中に混じっていたのは、そういう事情も加味してのことだった。

「では湯浴みにするとしよう」

むき出しの欲望が清廉なる着を襲う!

んん……

BEAT WALKYRIE DISEAL  
超原神騎 **エクシード**  
~双翼、魔境調教~  
THE COMIC

04

ここは……  
王座の間？

漫画 / **SHUKO**  
COMIC

みねさきりゅうのすけ  
原案 / **峰崎龍之介**  
DRAFT

原作 / **アリスソフト**  
ORIGINAL

!?

気がついたようだな



状況は理解  
できたようだな

くっダメ  
体に入らない……

お前は  
私に敗北し

せいがい  
聖鎧を維持する  
魔力すら失った

それどころか

その足を  
閉じることすら  
ままならない

くっ  
くっ

……私をどうする  
つもりですか？

調教する

そのために生かした

調教？

ああエイダムに  
穢された体を浄化し

お前を私のモノにする

勝手な  
ことを……

ああっ！！

口はなかなか  
強情だが

体はそうでも  
ないようだな

く……

モミッ

モミッ





ほう  
喘ぎを噛み殺したか

まだ抵抗する気概が  
残っているとはな



見ろ  
お前の乳首は既に  
卑猥に勃起  
しているぞ



そんなこと……



はあっ

……では  
これはどうだ？



ああああああああっ!!

熱い……  
なにかが込み上げてっ!!

な……

なにを……



なんつーよ……

あああ……

ギョッ

ギョッ

くく……



くうあああああああっ！

さあ

んっ



あああひっ！

あぐ……っ！

んっ



さあ  
これでも声を漏らさずに  
いられるか？



その間  
私は肉芽には  
手を出さない

じ自分で  
これを……？

そんな  
屈辱的なこと  
できるわけが……！

ではこのまま  
気絶するまで  
イカされまくるか？

くおおおおっ！

わかりました！

します……  
自分でしますから……！

ふん  
ふん

とっまりしあひ

# 被<sup>レ</sup>妖少女 ヤコ

妖産みし  
妖混ざり

孕まされし業は  
乙女の全てを喰らい尽くす

しもやまだ  
小説 **下山田ナンプラーの助**

挿絵 **ぼっしい**

月のない夜の帳が、学園を静かに包み込み。

闇に紛まぎれて現れるは、この世にあつてはならない魑魅魍魎ちみもうりよう。

「……今夜もやってきたね、瘴氣で澱んだこの地に惹かれて、妖怪たちが」

漆黒の空から、地面の下から、音もなく這はいずり現れて校庭を跋扈ばうこする異形たちに相對するように、短い黒髪こんぱくのセーラー服少女が物陰から飛び出した。

人の肉体や魂魄こんぱくを貪り食う妖怪たちは、氣の流れが澱んでいる地を好む。

少女が昼に通い、勉強を修めているこの学園がまさにその「澱んだ地」であり、この地に集まる悪鬼の群れを討はらうことが彼女の「夜の」役割。

「ゲゲゲゲ……ゲヒヒヒッ！」

「ギギッギ、ギヒヒイイ！」

知能のない妖怪はそのようなこと知る由もなく、二十歳にも届かない、ごく若い少女という、捕食対象の中でも飛び切り上等の獲物に舌なめずりをし。

食欲のみならず、陵辱の限りを尽くしてやろうと我先に少女へ飛び込んでいく。異形の群れに取り囲まれ、絶体絶命と見えた彼女だが。

「悪いけど、この地が好きなのはお前たちだけじゃないんだ。私にも……妖怪の

血が混じってるからね！」

一切取り乱す様子もなく、静かに目を閉じて気を研ぎ澄ます。

「——降魔調伏、我が身に流るる妖狐の血よ、目覚めよ！」

少女が、静かながらも力強くつぶやくと。

射干玉ぬばたまの夜に光の柱が立ち昇り、少女はその中で一糸まとわぬ姿となり。

やがて光が弱まると、彼女はそれまでのセーラー服とはまるで異なる衣装を身にまとい、襲いくる妖怪たちを見据えて。

「小金井ヤコ、妖魔を滅しその魂、冥府に送り返さん！」

そう、叫ぶ。

彼女の短かった黒髪はススキの穂のように黄金色に染まり長く伸び、頭頂部からは狐のような耳が生えていた。

着物とレオタードが融合したかのような、露出多めのハイレグ和風衣装に身を包み、食い込みのきつい臀部でんぶからは、ふさふさした狐の尻尾がポンと生えた。

何もなかった空間からは紙垂を施した長い柄に刃をあつらえ、妖力と神聖な力の両方が調和しみなぎる、槍のような得物が現れる。

そうして、巫女のような恰好になった半分狐と言える風貌に変化した少女、小金井ヤコは、妖を祓う妖の槍こと祓妖槍ふつようそうを高速で回転させながら妖の群れに突っ込み、そこから奔る妖力で魍魎魍魎を斬り裂いていく。

「人が生きるこの現世に、お前たちの生きる場所はないっ！」

千年前の日本は、今よりずっと妖怪に満ち溢あふれていた。

自然災害や原因不明の病はことごとくが妖怪のもたらすものであり、巫女や僧侶、陰陽師といった魔を祓うべき者は生涯をかけて彼らとの戦いに身を投じる定めを背負っていた。

そんな中、食らうべき人間の男に恋をした大妖怪がいて。

—— わらわの物になれ。でないと言様を食ってしまうぞ。 ——

—— いくら美しくとも、某は人食い狐は好かん。そなたが人を食わぬのなら、添い遂げよう。 ——

美しくも悪名高かった妖狐は人間を食らうことをやめ、一人の男と結ばれた。



(……それが私のご先祖様で、代々妖を狩る妖……妖混ざりとしてこの地にとどまることになってるんだよね。もう千年も経つのに、終わらないんだなあ)

あたりにはびこる妖怪を残らず斬り裂き、消滅させ、冥府に送り返し。

祓妖槍をクルクル回してから地面に突き立て、過激な衣装を身にまとう狐耳と狐尻尾の退魔少女・小金井ヤコは手の甲で額の汗をぬぐう。

人食いの妖狐は人間と結ばれ、妖の血が混じる子を産んだ。

その子はまた人間と交わり、千年の代替わりを経て化け狐の血は限りなく薄まり、令和の現代に生きるヤコにおいてはほぼ完全に普通の人間、普通の学生としてごく当たり前に人間社会に溶け込んでいた。

(実際もう、完全に人間だもんなあ私。妖怪の血はうっすーく流れてるけど、それで他の子と何か違うって感じたことはないし、この場所にいなければ妖力も使えないもんね)

しかしこの澱んだ地であれば、妖怪が力を増すようにヤコの中に流れる妖怪の血も覚醒し、悪鬼を祓う悪鬼の力を振るえる。

そうやって代々、自分たちの家系はこの「澱んだ地」とどまり、妖怪を祓い

続け人の世に安穩をもたらししてきた。

「さてと、帰ろっかな。宿題もまだやってな——」

夜ごとの稼業を終えた巫女風退魔少女は、妖力を落として元の少女の姿と格好に戻ろうとする。

しかしながらそんな折、大きめの妖氣がこの地に残っていることをパタパタと動く狐耳が知らせた。

「もうひと仕事、かあ」

落ち着かせていた妖力を再び集中させ、祓妖槍を構えて気配のした方を向くが、姿はない。見えない妖怪などいくらでも相手にしてきたし、それ自体は驚くべきことでもない。

気配のする方へ歩を進めると、妖氣が漏れ出しているひび割れた岩のようなものが目に入った。

(こんなの学園になかったはず……)

昼は学生として通い、夜は退魔稼業のために戦う場所だけに、見慣れないものがあればヤコはすぐに気がつく。

どうもこの岩は、周囲の土の盛り上がり具合から見るに地中から出てきたと思われる。

まるで長い間地下に封印されてきて、それが解かれて出土したかのように。

「……っ！」

すると、ひび割れた岩はヤコの目の前でバラバラに砕け。

土の下から、大の男よりもはるかに大きい人型の妖怪が現れる。

「ウ、ウウウ、ウウウウ……」

「こいつか。凶体は大きくても、千年磨かれた退魔の力と妖狐の血にはかなわないよ」

泥を塗り固めたかのような、醜い黒の巨体。

ぎよろぎよろとした二つの目が、金髪を揺らす狐耳少女、ヤコの顔を捉えると。

「ウウウ……ウオオオ、オオオオオオオオオオ——ン！」

「っ!？」

何の前触れもなく、妖怪は大口を開けて泣き喚わめいた。

雄たけびを上げる、というものではなく、涙を流して慟どうこく哭している。

自分の顔を見ていきなり泣き出すという、これまでの妖怪になかった反応にヤコが戸惑っていると、大型の醜い妖怪はなおもボロボロと涙をこぼしながら言う。「やつと……やつと見つけた、会えた、お、俺は、俺は俺は俺はアアアア！ ずっとお前に、ずっと会いたかったアアアアアア！」

「な、なに……!!」

「千年の間ずっとお前を想い、お前を愛し、お前を俺の物にしたいとずっと願ってたんだアアアアアア！」

両腕を広げ、歡喜を表すかのように泣きながら咆哮する妖怪。

見た目とは違う意味でひたすら不気味だ。

（何を言ってるの!? とにかく、戦わなくちゃ!）

ヤコは千年どころか二十年も生きていない。

なのに目の前の怪異は自分を千年も愛してただの、要領を得ないことを言うばかりか泣きながら突っ込んでくる。

妖怪の心などどうでもいい、自分は退魔師としての使命を果たすのみなのだから。

祓妖槍を構え、刃先に退魔の力と妖狐の力を乗せて振るう。

(っ、なかなか硬い身体っ……でも、連続で斬っていけば傷に入り込んだ妖力が内からこいつを爆ぜさせる！)

「俺のことを覚えてないのか？ 千年も経って忘れたのか？ この愚腕坊のことを、俺は、俺は俺は俺は、一瞬たりともお前を忘れたことなどなかったのにイイ！」

「お前なんか知らないっ！ 私は小金井ヤコ、お前の想い人なんかじゃない！」  
「違う、お前は妖狐だ、あの時の妖狐だアアア！ その耳、尻尾、ススキのような美しい髪、まごうことなき俺の惚れた化け狐だアアア！」  
会話が全く通じない。

しかしながら、「千年前」と「妖狐」といった単語から何となく思い当たる。

(この愚腕坊とかいう妖怪、私をご先祖様だと思ってる……!?)

「し……しまった！」

一瞬の隙を突かれ、祓妖槍を弾き飛ばされてしまう。クルクルと宙を舞った退魔師の得物は、ヤコのはるか後方の地面へ突き刺さった。

妖討ちし少女、  
今はただ鬼蟲の孕み袋にて

# 鬼討師 津那

淫孕の朔月

小説 NOVEL しいばよしかず 妻芝嘉和

にわえいと

挿絵  
ILLUSTRATION

2=8



夏の、月のない夜。

帝都の北限・一条通を西へ向かって歩く、ふたつの影がある。

身の丈十尺はあろうかという、山のように大きくて前後左右に分厚い鎧武者と、その小者だろうか、白い水干を纏まとった細く小柄な影だ。

宿直明とのいけらしく、武者は厳いかつい鎧を纏い、肩に大太刀を担いでいる。身長が身長だから短く見えるが、実際の長さは五尺ほどか。常人であれば持ち上げることさえ困難な大太刀を、巨大な武者は釣り竿のように軽々と担いでいる。

兜を被り面頬を着けているから、その表情は分からない。

かなり聞こし召しているらしく、右へ左へ揺れながら調子ツ外れの鼻歌を不機嫌な熊のように唸っている。

水干姿の小者は武者の少し前を歩き、手に提げた灯で足元を照らしている。新月の夜だから、提灯の中で微かに揺れる小さな炎以外の光はない——と。

「——はて、面妖な」

不意に足を止めた武者が、深い闇を透かし見ながら低い声で呟いた。

ふたりの行く手にポウツ……と、小さな灯が現れたのだ。

「こは如何なる怪異か」

唸るように言いながらも、武者は再び歩き始める。先ほどよりも大股なため、前を行く小者はやや小走りに。

鎧武者に比べたら遙かに小柄な小者だが、その動きには武の心得が感じ取れる。小走りになつてゐるのに、提灯の火が上下しないのだ。

その滑るような足取りは、速い。大柄な武者の無遠慮な大股歩きをいっさい妨げることなく、ずっと同じ距離を保ち続ける。まったく束ねられていない、腰に届きそうなほど長い垂髪が、微かな夜風に弄ばれて軽やかに揺れる。

風を巻いて、と言つても良いくらい速足のふたりは、すぐに妖しい灯のもとへ到着した。

堀川の上、右京区へと架けられた一条大橋の、たもと。

生温かな夏の夜風に微かに揺れる大柳、その垂れた枝々に隠れるようにして、女性がひとり、袖で顔を隠してシクシクと泣いている。

簡素ではあるが単衣に桂つちぎという、まるで部屋着のような姿。長い髪は艶々つやつやとして、夜気に微かに薰物の香が漂う。してみれば、下賤の者ではないだろう。どこ



ぞの姫か、女房か——そんな女の人がこんな夜更けに、このような場所で、ただひとり居ることはいかにも妖しい。

が、大柄な武者は怖いもの知らずなのか、それとも細かなことを気にしない性格なのか、

「いかがなされた、女房殿」

最後の一步をズイッと寄って、太い声で訊ねた。

静かな夜闇を打ち破るような、銅鑼の音のような声だ。

女人は驚いたらしく、ビクッと首を竦すくめて逃げ出しそうな素振り。

「こんな夜更けに供も連れず、女人一人では危なからう。どなたの女房かは知らぬが、拙者が送って進ぜよう」

相変わらぬの大声で朗らかに言う武者に、相変わらず顔を隠したままの女の人がなにかを言った。

「はて？ 濟まぬがもう少し大きな声で頼む」

「……たな……」

「たな？ ああ、刀か。これが怖いか。相済まぬ」

苦笑した武者が、肩に担いでいた大太刀を小者に渡した。

それを袖の影から見ていた女人が、再び蚊の鳴くような声でなにか言う。

「んん？ なにを言うておる？ 聞こえぬので、もう少し大きな声で……」

大柄な武者が身体を折り曲げ、首を捻ひねって、手を添えた右耳を女人のほうへ突き出した。

その広い肩を、厚い背を、太い首を——大柳の枝がさわさわと撫でる。

「おん……び……だい……る」

「なんじゃ？ 聞こえぬと言うに」

「御首頂戴仕る！」

突如、奇妙に軋きしむ耳障りな声が夜闇に響いた。

袷を脱ぎ捨てながら振り返った女人の顔には、耳まで裂けた大きな口。

その、上下に生えた鋭く長い牙が、無防備に差し出されていた武人の太い首に深々と刺さる——寸前。

白く冴え冴えとした光の筋が、武人と女人の間のわずかな闇を、下から上へと走り抜けた。

「ギエエエエエッ!?」

鼻先を掠めた光芒に驚き、弾かれたように反り返る女人。

その左腕、肘から先がない。

小者が音もなく引き抜いた大太刀によって、斬り飛ばされたのだ。

「ぬ……鶴切の太刀……貴様、鬼討師かッ!」

「如何にも」

凜とした声で応えた小者が、手早く水干を脱ぎ捨てた。

中から現れたのは軽装鎧。

身の丈ほどもある抜き身の大太刀を細い肩に軽々と担ぎ、背筋を伸ばして顎を引き、長い黒髪を背に靡かせながら、涼しげな瞳でまっすぐ前を見つめる。

女だ。

しかも、若い。

眼にかかる長さで切り揃えられた童女のような前髪と若い娘が好む鬢そぎ、そして女官のように長い髪というチグハグな髪型のせいで、ハッキリした年齢は分からない。しかし、控え目な胸の膨らみや腰から尻、太腿にかけてのほどよく引

き締まった若々しい曲線からすると、十代後半か、あるいは半ばか。

夜目にうつすらと光って見えるほど白く透き通った滑らかな肌、鋭く涼しげな切れ長の瞳、濡れ濡れと光る紅い唇——容貌は輝くほどに瑞々しく若々しいのに、すつと伸ばした背筋や落ち着き払った<sup>たたず</sup>佇まいには老練の気配が色濃く漂う。微かな風に弄ばれ、夜闇に半ば溶け込みながら軽やかに揺れている長い長い黒髪も相俟って、彼女もまた——<sup>あやかし</sup>妖のように見える。

「渡辺直が娘、津那<sup>つな</sup>。帝の命を受け、そなたを討ちに参った」

若い女鬼討師が胸を張って名乗りを上げると同時に、大柄な武者は無言で<sup>しりぞ</sup>退く。主従が完全に逆転し——。

「渡辺……あの渡辺かあ……ッ！」

爛々<sup>らんらん</sup>と光る瞳で津那を睨みつけた女人の、長い長い黒髪が、まるで生き物のようにぞわぞわと蠢き始めた。唇を押し退けて鋭い牙が生え出し、額にも小さな角が現れる。

鬼だ。

この時代、度重なる天災と戦によって帝都の人心は乱れ、それに乗じて道に外

れた術を操る外法師たちが跳梁跋扈ちやうりょうばつこしていた。

「鬼」とは、その外法師たちが好んで操る異形のモノの総称である。たいていの鬼は人間を作り替えたモノだが、獣や蟲などを元にした鬼もある。

元がなんであれ、いったん鬼となったモノは外道の術に守られているから、普通の弓や刃では倒せない。そこで登場したのが、武術だけでなく法術も身に付けた鬼退治の専門家・鬼討師だ。

武と法に長じるには修行だけでは足りず、生まれもつての素質がかなり大きな要因を占める。当然、鬼討師に成れる者は多くなく、まして女、しかもこの若さは、極めて珍しい。

しかし、精悍せいこんに引き締まった津那の身体を包む純白の単衣と、要所要所に金の縁取りが為された軽装鎧、そして鬼を斬るためだけに誂あつらえられた五尺の大太刀は、真正銘の鬼討師である証。

「そなたを知る者が、そのような浅ましき姿を見たら、どのように思うか……もし人の心がまだ在るならば、我に大人しく討たれよ」

白磁はくじのようにしっとり輝く頬を真正面に向け、凜と言い放つ津那。微かな星明

かりを浴びた黒漆の籠手が、大袖が、草摺くさずりが、金の縁取りとともに艶あでやかに光る。

「おのれ、小娘え……」

髪をおどろに乱し、額に角を躪した女人は、斬られた左腕を庇うように半身になりながらジリ、ジリ、と後退り始めた。

暗闇の中、水音だけが聞こえる堀川——その上にかかる、一条大橋へ。

かつて死者が一時的に蘇ったという言い伝えがあるため戻橋とも呼ばれるこの橋は、帝都の中でもっとも黄泉国に近い。もちろん、法力がない者にとってはただの橋だが、しかし術者にとっては力の源となる。

おどろ髪の鬼女も、橋の魔力を利用しようというのだろうか。

爛々と光る獣じみた瞳で武者姿の乙女を睨みつつ、ジリジリと後退して——。

「……キシヤアアアツ！」

いきなり奇声を上げ、無事な右腕を素早く振った。

「ぬッ!!」

鼻先に迫る殺気に反応し、身の丈ほどもある大太刀を横薙ぎに振る津那。が、冴え冴えと光る切っ先は地を這はうように身を屈めた鬼女の頭上を空振りし、乱れ

髪の毛の先端をわずかに斬り飛ばしただけ。

次の瞬間、闇の中でふたつの影が交錯する。

鬼女の額を狙って突き出した柄尻は、鋭い牙にガツキと噛み止められていた。爛々と光る鬼女の瞳と鋼線のように硬い女鬼討師の瞳がすぐ間近で睨み合い、

「——ぬんっ！」

「シャツ！」

ふたり同時に飛び退いて、いったん間合いを取り直す。

——津那の単衣の胸元に、ざっくりとした裂け目。飛び退く一瞬に、鬼女の鋭い爪が掠めたのだ。肌こそ切れていないが、しかし、白磁のように艶々として滑らかな乳肌がわずかに顔を覗かせる。

一方、鬼女は——その口に、先ほど斬り飛ばされた己の左腕を咥くわえていた。飛び退きざま、足元に転がっていたそれを踏みつけて跳ね上げ、蛇のようにくねる長い髪で搦め捕って回収したのだ。

外法師によって作り替えられた鬼には、必ず術がかけられている。もし、その鬼が身に着けている物を入手できれば、用いられている術を分析し、外法師の正

体を明かすことができる。

それは衣服の切れ端でも可能なのだから、身体の一部であればなおのこと。

だから、鬼女は津那を攻撃すると見せかけ、わずかに生じた隙を突いて、左腕を取り返したのだ。

そして身を翻し、ひるがえ単衣の裾をはためかせながら大橋を駆けて、対岸へ。

その先の闇は、いつそう濃い。

一条大橋の向こう、帝都の西に広がる右京区は、数年前の戦で火を放たれて以降住む人がおらず、ずっと放置されたままなのだ。

腕を取り返した鬼女はそこへ駆けて行ったのだから、彼女を作った外法師もその闇の中にいるのか――。

しかし津那は慌てることなく、白く光る大太刀を鞘に収める。

「せっかちな鬼だ。血の跡も消さぬとは――ゆくぞ、虎王丸」

「応」

低く唸った巨大な鎧武者が、膝をついて身を屈める。

その肩に、長い黒髪を靡かせた女鬼討師がふわりと飛び乗り――。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<https://ktcom.jp/>**